

折々の記 No10： 道義もて世界のリーダーたるべし！

(脱稿：H16/6/14)

(本稿は、5月上旬に脱稿する予定であったが、第一生命の社用にて博多、仙台、名古屋、大阪、札幌等に出張の所謂5月の全国行脚のため延び延びになっていたものである。)

世界中の人々をおぞましく感じさせる写真が全世界を駆け巡った。言わずと知れたイラクのアブグレイブ刑務所における米兵によるイラク人被拘束者に対する拷問・虐待問題の発覚である。裸にしたイラク人被拘束者の人間ピラミッドとその傍らでこやかにポーズを取る女性兵士、黒い布を被せられた素っ裸の男性被拘束者に直結されている拷問用の電線、自慰の強要、等々人間が人間に為し得る限界をはるかに超えた正視に堪えない、聞くに耐えない情景が次々と暴露されつつある。タクバ少将の報告書の要約を読んで貰えば、サディステック、恥知らず、淫らな虐待犯罪である。報告書は然も組織的であると断じてすらいる。

世界各国からは非難轟々であり、米国内においても国防長官の辞任を求める声があがり始めている。イラク国内のみならずイスラム社会の米国に対する反発はいやが上にも高まりを見せつつある。大統領の必死の釈明・弁明にも関らず沈静化の兆しすら見えない。

今回の事件がイラク開放と言うイラク戦争の大義にすら疑問を投げかけ始めている。由々しき事態である。世界最古の四千年の歴史を有する誇り高きイラク国民の到底容認出来るものではない。

自国民の非拘束者に対しては厳格なジュネーブ条約の適用を求める米国が、アフガニスタンでの非拘束者に対しては、ジュネーブ条約は適用されない等と言う身勝手・独自の解釈を公表したことが、(イラクにおいては、イラク軍人については、戦争捕虜としての権利を有し、一般人についても人道的に取り扱う旨述べているにも関わらず、)陰に陽に影響しているのかも知れない。

この米国のダブルスタンダード的な行動に対して、全世界が、“傲慢な米国”との印象を持ってしまった。大失敗である。道義を持って世界のリーダーになるべきであり、力だけで世界をリードしようとしても無理だ。そんなものは何れ破綻するのは明白だ。

然も、民族差別や人種差別的意識が根底にあるとすれば事態は益々悪化する。そうでない事を祈るのみだ。

これらの行為を国際法の観点から整理してみると、新聞報道では捕虜となっているけれども、戦闘員資格を有する捕虜だけではなく、むしろ反米活動を行った等の理由で抑留されている者に対する抑留者をも含まれている。

捕虜に対しては、『捕虜の待遇に関するジュネーブ条約』(第III条約、捕虜条約)が適用され、文民(イラク国民)の抑留者に対しては、戦時における文民の保護に関するジュネーブ条約(第IV条約、文民条約)が適用される。

捕虜条約も文民条約も共通項がかなり多い。曰く、人道的待遇・報復の禁止、名誉を傷つける行為等の禁止、給養・医療・衛生等々に関わる抑留条件への違背、赤十字国際委員会等の訪問等妨害等である。文民については更に捕虜等と分離して収容管理すべきとの規定違反等である。

イラクにおいてもアフガニスタンにおいても米国が必要とする情報の収集が効果的に出来ていない事から来る焦りが、彼等に逸脱した異常行動を取らせているのだろうか。捕虜収容所や刑務所の管理は、憲兵隊の任務であろう。彼等がジュネーブ条約の基本的な事を

知らない筈が無い。

組織的だったのかどうか、当該刑務所の指揮監督上の問題だったのかどうか、イラク派遣部隊の兵隊の士気モラルに関する問題なのか、色々と問題があるようだ。今後の厳格な調査とその公表が待たれる。米軍に自浄能力があるのかどうか問われている。

大統領選挙にも暗雲が漂い始めた？日本にも相応の影響があるのだろうか。イラクでの行動が分明の衝突とかそのような視点で捉えられた時点で米英有志連合は負けだ。あくまでもサダムの圧政からの開放であり、その視点からの占領統治を為すべきであり、その為に最も重要な事はイラク国民の信頼を得る事である。然しながら、彼等がやっている事はその逆ばかりだと言ったら言い過ぎか。米軍に知己の居る身としてはもどかしくさえある。

ユニラティズムだとか単独主義とか、パックスアメリカーナとか、唯一の超大国とか言われて久しいが、そうであればあるほど、慎重且つ謙虚に振舞うべきである。それによって信を得なければ真の意味での世界のリーダー足り得ない。腹に据えかねることもあろう。それでも道義を持って相手に対する位の度量が欲しいものだ。力ある者に正義が備わらねば世界は真っ暗だ。力が正義であってはならぬ。

(本稿執筆に際し第5旅団司令部 鈴木法務官にお世話になった。御礼申し上げます。)